

2012

## 第6回 中世の書物3 お伽草子〈本〉と〈草〉

橋口 侯之介

## 〈本〉と〈草〉という考え方

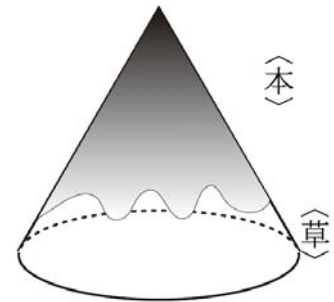
平安時代の書物は、仏典（経文や教理）や公家の記録、勅撰の和歌集などが主で、基本的に卷子に仕立て、和歌以外は漢文で書かれていた。それに対して仮名の物語は一段低いものとみなされてきた。

この関係が〈本〉と〈草〉である。

〈本〉とは本物、本格、本来、根本と「大木の根本」といった意味である。それに対して〈草〉とは、野原の草のように、格下、本式でないことで、今でも草野球・草競馬というように使う。物語は〈草〉だったし、事実、草紙・草子＝冊子・双紙と呼ばれた。読みは同じ【さうし】。

この関係は、該当する書物こそ変わるが、つねにいつの時代にもあった。

それは、たんに格上と格下があっただけでなく、そこにこそ「書物」のもつ本質が隠されている。



## 中世における〈本〉と〈草〉

中世の寺院はピラミッドの上部に僧侶がおり、学問の中心を形成していた。それが中世の〈本〉のカテゴリーに属する書物である。漢籍や医学書などもつくられたが、圧倒的に仏典である。文学においても平安時代の物語は古典として格上げされ、〈本〉の側に入った。中世の『徒然草』『方丈記』などの随筆、『古事談』（説話集）『梁塵抄』（平安末期の歌謡集）なども〈本〉として扱われた。

それに対して、新たに成り立った中世の物語の世界が存在していて、それが〈草〉の位置になった。

このように〈本〉と〈草〉は総量としてボリュームを増やしながら内部で、「位相」を変える運動をしており、〈本〉と〈草〉の相対的な関係やその境界のあり方を変えていく。これは江戸時代までダイナミックに続く。今回はその中世における〈草〉の側を見ていく。

## 寺院の下層民、遊芸者

京都・奈良など近畿地方全体には、強大な寺院や神社がいくつもあり、内部はピラミッド型の権力構造があり、その頂点に学侶と呼ばれるエリートいた。その下に武家出身の一般僧がいてここまでを僧侶といた。その下に多数いた大衆層が寺院の形成する都市周辺に集まって住んでいた。前回述べた経師もこういう層の人たちで構成されていたし、その末端が商工業と深く結びついていた。

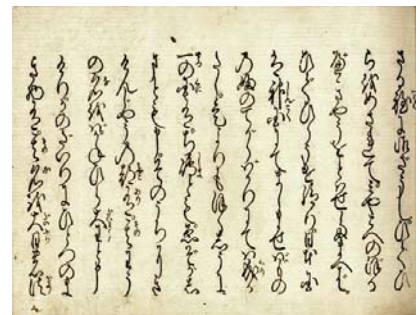
さらにこの寺社に出入りする聖ひじりや神人しにんがいた。彼らはいわば放浪民であり、商人でもあり芸能者でもあった。

たとえば、琵琶を弾きながら教を絵解きしながら説いていくのが琵琶法師ともいわれる盲目の芸能民で『平家物語』を弾き語りした（＝平曲）のはよく知られている。

この芸能者の特徴は、寺社に隷属する一方、特権も与えられていて各地を放浪した。中世の寺社はしだいに民衆教化、救済に向かっておりその末端を担った。この民衆教化の語りを説経せつきょうとか唱導しょうどうといった。

## 本地物、説経節

唱導がより俗化していくと、仏教の教理より寺社の縁起や神仏の靈験を物語にするようになった。これを本地物ほんじといた。中世の本地垂迹説すいじやくからきており、仏・菩薩が衆生を救うために姿を変えて現れた神が靈験あらたかであることを民衆に語るものである。南北朝



江戸時代の御伽草子から『御曹子島渡り』

時代には成立したといわれる。

『さんせい太夫』(安寿と厨子王)は丹後の<sup>かなやぎ</sup>金焼地蔵の本地物だし、『しんとく丸』四天王寺と清水観音  
が関係する。

このような話(本地もの)を下級の<sup>おんみょうじ</sup>陰陽師である<sup>しよもじ</sup>声聞師や<sup>しゆげんじや</sup>修験者(山伏)などの遊芸民が哀感をこめて  
<sup>かね</sup>鉦などを鳴らし舞を踊りをしながら各地を回ったのを説経節といった。室町時代末期に三味線が普及す  
ると芸域が広がり、<sup>じゆりやう</sup>浄瑠璃を生んだ。

一方、<sup>しらびようし</sup>白拍子(男装する女性芸能者)による<sup>くせまい</sup>曲舞から出た<sup>さいわく</sup>幸若舞、興福寺などの猿楽から発展した<sup>のう</sup>能も  
寺社末端の芸能だったが、室町時代から上級の武士に支持されて、江戸時代も幕府の<sup>しき</sup>式楽になった。た  
だし能は盛んになったが幸若は滅びた。

## 書物にはなりにくい唱導文学

これらが文字として残ることはまれだった。文字による原作があって、それを元に作品にしていっただけ  
ではなく、遊芸民たちの語り物が先なので、文字化はずっと遅れた。テキストとして読めるようになる  
には、ほとんどが近世に入ってからである。

## お伽草子と「奈良絵本」

室町時代小説とか、室町物語といわれたジャンルは現在「お伽草子」と呼ぶようになっている。もともと語り物として伝えられたものが文字化されて、少しずつ書物になって今日500種ほど確認されている。



お伽草子のひとつ『酒飯論』。上戸と下戸の争い

このうち室町時代中期から江戸時代前期にかけて、絵物語に仕立てた書物を<sup>ならえほん</sup>奈良絵本と呼ぶ。ただしこれも明治以降の用語で、中世にそう呼ばれていたわけではない(中世末から江戸初期には「絵さうし」ともいわれていた)。それが絵巻の形態をとるものは奈良絵巻と称する。お伽草子が多いが、『源氏物語』や『住吉物語』などの古典もあった。

御所や将軍家、公家、上級の武士たちの婦女子のために提供された。泥絵具を用いた素朴なものから金銀をまじえた大和絵風の極彩色の豪華なものまであって、ピークは近世の前期である。

絵巻にしたものは文と絵が交互にあらわれる伝統的な絵巻の構成を踏襲している。冊子本の奈良絵は、後の絵入り本に与えた影響が大きく、江戸時代の版本の基本形となった。

## 日本独特の絵巻物文芸

物語そのものは冊子に仕立てたが、絵入りの物語は卷子にした。絵と詞書を組み合わせた手法は、一葉ごとにめくっていく冊子形式より継紙にして巻いていくほうがずっと向いていたからだ。

この絵が入ることの意義は大変大きい。物之本側でも絵入りの本はあるが、それは図示すること、つまり言葉だけでは表現しきれない説明を絵でよりわかりやすくするという使い方だった。そこでは文と絵が併用されていた。それに対して、〈草〉の側の絵は、必ずしも説明的ではない。イメージを膨らませることが目的で、場合によっては作者の意図と関係のないところで絵が用いられていたりする。

## 〈草〉に継がれる絵巻の時空表現

絵巻は基本的に絵と詞書が交互に書かれ、文と画像を鑑賞するようにできている。その特徴は時間の流

れを追いながら、同時に空間の広がりも見せてくれるところにある。巻物の見方は図のように人の肩幅くらい、つまりおよそ六十センチくらいずつ広げていく。それは絵巻がそのように見られることを前提につくられているからである。部屋に置いて、床に座ってこのように巻物をくくる。すると斜め上の角度から見ることになる。絵はそれを計算に入れて、斜め上空から下をながめた俯瞰描写になっているものが多い。巻物の大きさは基本的に十二世紀頃から近世までのほとんどが30cmから40cmくらいで、床に置いて座って見たときに人間の視覚にちょうどよい寸法である。



絵巻のよさはこれにとらわれずに左右をもっと長く描くことも自由だ。大きなものを人が追いかける、大勢の人が群がっているさまなどは、横に広がると躍動感や迫力が出る。群衆が驚くさまをカメラが移動しながら追っていく映画的手法と同じである。さらに一枚の長い絵に同じ人物が二度出てくることが許されており、動きや時間の流れを表現する。これを「異時同図法」といって、日本の絵巻が発明した手法といつてよい。たとえば、絵の右側では男が訪ねて建物に近づく画面を描き、左側にはその男がすでに部屋に入っていて女性と接している、というふうなのである。

広げながら時間軸を追うことで空間が繰り広げるさまざまな事態が体験できる仕組みになる。これが、日本のアニメーションの発達に大きく寄与したところ。

このように卷子、とくに絵巻の妙味は、自分で開きながら流れるように見ていくところにある。しかも、速度を加減しながら、じっくり見たいところはゆっくり、すぐ次に進みたいときは早回しにしてよい。詞書のところは声を出して読む。当時は詞書が音読されたはずである。それが今日の映像作品のナレーションの役を果たす。今のアニメ映画に近い。

しだいに工夫がこらされて絵の中に文字を入れて解説したり、人物のせりふをいれる「画中詞」という技法も出てくる。こうなるとまさに漫画（コミック）の起源である。

### 中世の役割は近世につなげる

中世における〈本〉と〈草〉は、書物だけ見ると〈本〉の側の圧倒的な質量となる。〈草〉はまだ語りを中心で書物化されていないものが多いし、お伽草子500種といっても十万点はあろうという〈本〉にはかなわない。〈草〉は三角形の底辺に薄く存在した形だ。

それだけを取り上げると書物にとって中世は「暗黒時代」だったように見受けられる。しかし、それは紙に書かれて綴じられたもの＝書物という概念にとらわれている見方である。

物語などの中身をコンテンツと今風にいえば、中世は書物の中には少ないが、語りの中で熱く成長していた。だから、これが紙の上で印刷されるようになる近世に大きく花開いている。決して中世は書物文化の暗黒時代ではなかったのである。

江戸時代になると中世的な流浪の芸能はしだいに定住化する。それにつれて劇場での演劇が盛んになるが、それでも草紙と演劇は深い関係にあった。

### 参考文献

- 橋口侯之介『和本への招待』2011、角川選書 第五章
- 徳田和夫編『お伽草子事典』2002、東京堂出版
- 徳田和夫編『お伽草子百花繚乱』2008、笠間書院
- 岩崎武夫『さんせう太夫考—中世の説経語り』1973、平凡社
- 安田次郎『寺社と芸能の中世』2009、山川リブレット